

被助成者 (特活) 開発教育協会 印

コード 番号	04-A-284
-----------	----------

「平和と開発」に関する教育学習ネットワーク構築事業

1. 活動の目的・背景

「9.11 事件」の背景にある文化、民族、宗教、への不寛容、経済の格差、貧困、などの「構造的な暴力」の問題と共に、紛争・戦争といった「直接的な暴力」の問題にも「教育」という視点から取り組む。

また 2005 年が国連の「持続可能な開発のための教育の 10 年」の開始年に当ることと、同時に「国連ミレニアム開発目標」の中間レビュー年になることから、世界と地域の開発問題について多方面から議論することを平和な社会を創ることにつなげたい。

地域で平和な社会を創るための活動をされている方々の研究や経験の成果を共有し、学びあう機会を提供することにより、人々を有機的につなぐネットワークの構築を目的とする。

2. 活動の内容と方法・実施報告

1) 「教材体験 FESTA 2005」の開催 (「平和と開発に関する教育・学習」プレ・フォーラム)

日時：2005 年 3 月 26 日 (土) 10:00～19:30
27 日 (日) 10:00～17:20

会場：横浜 YMCA

参加者：約 300 名 (延べ)

助成：(財) 庭野平和財団

協力：(財) 横浜 YMCA

ねらい：

「平和教育・学習」や開発教育・地球市民教育に取り組む実践者や研究者を対象に、平和・開発問題に関わる地球的課題をテーマにした教材を参加型で紹介し、実践者が現場で活用できるような形で提供した。

参加者同士の経験交流の場も提供し、「平和・開発」

をテーマにした学習がより広まることを目的とした。

<プログラムの内容>

a. 教室で学ぶ難民問題

講師：丸山まり子 (小学校教員)

参加者：30 名

ねらい

- ・戦争によって生み出される多くの「難民」と呼ばれる人たちについて理解する。
- ・難民問題を身近に感じ、問題の解決に積極的に取り組む態度を身に付けさせる。

展開

- ① アイスブレイキング
- ② ワークショップ
- ③ 話し合い

実践の背景

地球上では戦争が繰り返され、犠牲となった子どもたちの様子がテレビで映し出されるが、テレビを切ると元の生活に戻ってしまう。

この教材では体験したり、自分で決めたりする参加型の学習を多く盛り込んでいる。自分に照らし合わせて学習することで、難民の状況を自分に引き寄せて学ぶことができる。また、写真やビデオを併せて活用することで、難民の子どもたちを身近に感じようになる。グループの活動に積極的に参加し、話し合うことで問題を解決する態度が育っていく。

参加者の様子

緊張気味の参加者もグループで意見交換、全体の場で発表の機会が出てくるうちに次第に打ち解けていった様子であった。また、参加者各自が難民について疑問に思うこと、知りたいことを事前に用意してワークショップに臨んでおり、難民問題への関心の高さがうかがえた。

実際に難民の立場になるワークショップでは戦争から逃げている状況を想定し、緊張感を持って参加

していた。逃げるにあたり、必要最低限のものを決めるところからかなり悩んでいた様子。「入国審査」の場面ではまず内容の分からないカードがあり、さらに審査官の存在もあってかなり混乱、なかなか次のステップに進めない状況に陥っていた。ワークを終えた後の、難民少年の実体験に基づく話や、「エルメスのスカーフ」の話には各参加者とも真剣に聞き入っていた。

まとめの段階になると参加者の間にあった緊張感もだいぶほぐれ、話し合いもかなり活発に行なわれるようになっていた。

参加者の感想—アンケートより

- ・最後のビデオが感動的。重い問題を扱った時は、最後は希望を持って終わりたい。
- ・よく工夫されていた教材だった。
- ・ドラマ仕立ての展開でついつい引き込まれ、また子どもたちでも分かりやすいような工夫が随所にあり、とても参考になった。現状を知り、重い気持ちになって終わるのではなく、希望を持てる内容となっていたところが印象的。
- ・自分が難民になった時に役に立ちそうな体験・知識を得ることができた。

<所感>

難民についてはあまり知識や情報がないことから、多くの教員や実践者が扱うことに躊躇するが、実際世界の最も弱い立場の人々のおかれている状況を理解することにより、世界の構造やそこに働く様々な暴力に気づくことが出来る。難民の子ども達を身近に感じ、話し合うことを目的とした教材が提供できる意義は大きい。

b. 世界がもし 100 人の村だったら

講師：加藤英嗣 ほか

参加者：30名

ねらい：

- ・世界を 100 人の村に見立て、世界の現実をわかりやすく把握する。
- ・世界には多様な言語や文化を持つ人々が暮らし、そこには大きな貧富の格差が存在することを理解する。

展開

- ① アイスブレイキング
- ② アクティビティ（「世界の人口」、「女性と男性、どっちが多い」、「大陸ごとに分かれてみよう!」、「世界の言葉でこんにちは」、「世界の富は誰がもっているの?」）

- ③ 100 人村朗読、ディスカッション「わたしの気持ち」
- ④ （教材に関する意見交換（教材使用の注意点・今後の展開案など））

参加者の感想—アンケートより

- ・世間によく知られている教材なので、生徒には取り組みやすい内容だし、世界の状況も分かりやすく把握できる。
- ・動きもあり、短時間で視覚的・胃袋的（?）にいろんなことを実感でき、導入としては既成の教材の中で一番良いと思った。
- ・導入としてとてもおもしろかった。
- ・グローバルとは広く大きく見ることとばかり思っていたが、縮小することで身近に感じられ、驚いた。

<所感>

・感想にもあるように世界の構造、格差、多様性を大きく体感することができる教材である。つまり、世界はとても不公平で平和からは遠い状態であることを踏まえて、未来が私たちの手の中にあることを改めて意識せざるをえない。また国内の不平等も大きく、展開の可能性も広がる教材であり、参加者が様々な形にアレンジして活用されることを願う。

c. 戦争と女性を考える WS

講師：出口雅子（フィリピン元「慰安婦」支援ネット・三多摩（ロラネット））ほか

参加者：30名

ねらい：

- ・「慰安婦」とされたひとりの女性の人生を軸に、一人一人が感じ、考え、表現することで、「戦争と女性」の問題について身近に引き寄せて考える。
- ・世界各地で現在も続く戦争や性暴力について、考えるきっかけを作る。

展開

- ① アイスブレイキング（自分の 14 歳の時のことを思い出す）
- ② レメディアスさんのスケッチ
- ③ 感情カード・ビデオ上映
- ④ 戦争と女性について話し合う

参加者の感想—アンケートより

- ・深刻な主題だが、講師の温かい雰囲気・配慮に心を開いて臨めた。このようなテーマでどのように進めるのについて示唆を与えられた。
- ・被害者の側だけでなく加害者の側も考えられるような問いかけがあったこと。感情カードの活

用も良かった。

<所感>

- ・ 戦争における個の視点から「戦争と女性」の問題についてより具体的に学習するための教材。60年前だけでなく、今なお世界各地で続いている戦争や性暴力の問題について、参加者が考えていくきっかけを与えている。
- ・ 今回は時間の関係で時間が足りなかったのであるが、参加者にとっては有意義な時間となったようである。一つでも多くの学校がこのような課題を生徒達と考える時間がもてるきっかけになれば良いと思う。

d. もっと話そう！平和のためにできること

講師：木下理仁（ワークショップクリエイター
ねらい

- ・ イラク情勢、パレスチナとイスラエルの関係、日本と北朝鮮の関係など平和が脅かされている事例を取り上げ、問題を多角的に考えていく。
- ・ 自分自身の内面を見つめること、他者の考えを知ること、問題の所在を明らかにすることから、平和を築くためにできること（行動）を見つける。

展開

- ① 戦争と平和を考えるワークショップ
- ② ふりかえり
- ③ この教材の活用方法に関する意見交換

参加者の感想

- ・ 「平和」について様々な意見を聴き、考えることが出来て良かった。
- ・ 様々な角度から見つめ、open に話げできたのはとても良かった。
- ・ イラクやアフガニスタンで起こっている問題はひじょうに難しいが、現実と理想の違いをどう克服していくかを考えるのがすごく深かった。
- ・ 一番満足。お互いの意見が言い合えてよかった。これが一番大切。

<所感>

- ・ 平和を築くためにとことん話し合う、一見シンプルのように見えて最も難しいことかもしれない。しかし平和は誰かが与えてくれるものではなく、私達が生み出すしかない。それには仲間が必要で、そしてコミュニケーションも続けていかなければならない。スキルだけでは活用しきれない教材の難しさである。
- ・ 2001年9月の同時多発テロ事件とその後のアフガン空爆、難民という事態を受け、「非常事態の前で

開発教育は無力なのか？」という問いかけを経て緊急に制作された教材『Talk for Peace!』。その後、パレスチナ情勢の悪化やイラク戦争の開始など、さらに緊張、泥沼化していく世界情勢を踏まえ、増補改訂版として『もっと話そう！平和を築くためにできること』が作られた。

2)『第23回開発教育全国研究集会』の開催 (開発と平和に関する教育・学習 全国フォーラム)

日時：

第一部開発教育フォーラム

2005年8月5日（金）10:00～19:30

第二部開発教育研究会

8月6日（土）10:00～20:00

8月7日（日）10:00～16:00

会場：明治学院大学 白金キャンパス

参加者：約300名

助成：(財)庭野平和財団

協力：明治学院大学国際平和研究所

後援：外務省、文部科学省、環境省、東京都、(財)自治体国際化協会、(独法)国際協力機構、(特活)国際協力NGOセンター、(特活)関西NGO協議会、日本国際理解教育学会

a. 第一部「開発教育フォーラム」

① ワークショップ体験コーナー

日時：2005年8月5日（金）13:00～17:00

ねらい：

- ・ 開発教育・平和教育が初めての方もワークショップを通して課題について知り、他の参加者と話し合うことにより、個々の活動や教育のあり方を考える
- ・ 様々な立場の方々が意見・情報交換をして教育のネットワークを築くこと。

展開：8つのワークショップを2コマ行なうことにより、参加者は様々なテーマを楽しみながら学ぶことができる。

それぞれは時間内に完結しているが、より理解を深めなければ教材を購入して自ら学習することが出来る。

<所感>

- ・ 3月のプレフォーラムで、参加者の反応が良かったものに加え、新しい教材や初心者でも楽しめるものを用意した。
- ・ その結果新しい参加者も増えて難しいと思われがち「開発教育」「平和教育」が身近に、そして楽しく出来ることを実感した。

② 映画&トーク『あしがらさん』

日時：2005年8月5日（金）17:30～19:30

ねらい：一人の路上生活者に寄り添い3年間の末にできたドキュメンタリー作品を通して、日本社会の開発・貧困問題を身近に感じ、子ども達のおかれている立場との共通点も考えながら、「日本の開発・貧困」について改めて考える機会とする。

展開：『あしがらさん』上映

トークショー 飯田基晴（映画監督）・北村年子（ルポライター）

参加者の感想

- ・ ホームレスの方々との距離が縮まった。素晴らしい作品だ。「心のホームレス」という言葉も印象的だった。
- ・ 日本の貧しさを実感できた。
- ・ なかなか見ることでできない映画だった。グローバル化の中で足元の問題はとても重要である。
- ・ 映画を見る前の自分と見た後の自分では何かが変わった。よい機会を与えて下さったことに感謝。
- ・ あしがらさんが心を開いていく姿に感動しました。飯田さん、後藤さん、北村さんにも強い印象を受けました。本校のPTAにも観てもらいたいと思い、テープ・本も購入した。

<所感>

なかなか踏み込めないでいる日本の貧困問題について、色々な気づきを与えてくれた。参加者の評価も非常に高く、身近な問題から、平和や開発そして、生きること、かかわること、を考えるきっかけになったようだ。

③シンポジウム『持続可能な社会をつくるために～現代の「平和」を考える』

日時：2005年8月6日（土）10:00～12:00

参加者：約300名

ねらい：

- ・ 経済のグローバル化が進む現代社会のなかで私達が見落としがちな社会の「しくみ」や「構造」に気づき、個々の意識や行動が社会をつくる原動力になることを様々な事例を通して確認する。
- ・ 地域で持続可能な社会作りに先駆的に取り組んできた方々の話を通して「社会への参加」を軸として、世界の問題、地域の問題を理解し、私達にできることを考える。

内容：

・課題提起「エコとピースのオルタナティブ」

田中優（未来バンク事業組合 理事長、JVC 理事）

・ パネルトーク

田中優

浜本裕子（YMCA 学院高校、関西 NGO 大学、ESD 関西）

山浦光雄（長野県富士見町立境小学校）

佐渡友哲（日本大学教授、DEAR 理事）

<課題提起要旨>

・サステナブルな社会について

私たちの社会の未来を描くと、現状の社会は石油社会だったと気づく。石油が上から流れ込んできて、石油コンビナートでそれぞれに分割されていき、その下に発電やプラスチックなどが来て、私たちがそのために働かされている。でも自然エネルギーに変わって、ただの太陽発電になれば、私たちは無理に働かなくても、電気については困らなくなる。そうすると私たちは自分から働こうと思ったときに自分から働くようになる。つまり、ヒエラルキーが逆転する。この質の高い順から落として使うことを、小さい滝に似ているので、カスケード利用、カスケードティンギングと呼ぶ。

それを使って、こう考える。現在木が育つのに50年かかる。それを日本では数年で取り壊している。例えば5年で使い切るとすれば、森は90%毎年減っていく。ところが、もし60年かけてその木を使うと、森は毎年20%増えることになる。持続可能な社会を物理的に考えると、更新されてくる資源を使い、なおかつ成長よりも長い時間をかけて使ってやればいい。それだけのこと。カスケードティンギングというのはそれを可能にする仕組みのひとつである。

・パラダイムシフト

どうしたら持続可能な社会を作れるか。私たちはこれまで2つの方向で運動してきた。ひとつは「タテ」。自ら政治家になったり政治家に影響を及ぼしたり、上から下、下から上に社会を動かそうとしていた。もうひとつの方向は「ヨコ」。ムーブメントを起こそうと、隣の人に話しかけ、多くの人に知らせることによって社会を変えていこうということをやっていた。

しかし実はもう一つあってそれは「ナナメ」。全く別の仕組みを考えて、現実には新たなやり方を見て見せる方法。オルタナティブな社会をイメージしたのだとすれば、そこに進んでいくための現実のツールを自分たちで作っていけばいいのではないかな。

この社会はどう考えても変えていかなければなら

ない。その主体は誰かに任せるのではなく、自分たちがどのように変えていくか、考えていくことが欠かせない。

・開発について

「開発」については、まさに企業と私達が考える定義は大きく異なる。その次に考えなくてはならないのが、構造である。物事を解決したいと思ったら、何が原因なのかを突き止めないといけない。原因に対して対策をしないと解決できないから解明しようという姿勢が大切。構造自体をつかまないと、現状だけをみて首をひねっていても解決できない。そこについて考えていかななくてはならないし、そのプロセスをほかの人たちと共有していくこと、それがESDなのではないか。

<所感>

田中優氏の具体的な課題提起は非常に説得力があった。石油の奪い合いが戦争を起こしており、エネルギーを自然エネルギーにシフトさせること、そして、目には見えない、環境コスト、戦争コストも原油価格に入れていくこと、また、企業の競争原理の問題を指摘し、変化のためのルール、政策を考えることが必要であるとした意見は非常に分かりやすく明確であった。

市民運動がときに感情論に流されやすい中で活動を継続的にそして、成果の見える形にしていく必要がある。そのことについて田中氏はじめ、他のパネリストからもたくさんのヒントをもらった。

浜本氏からは、ESD 関西や関西 NGO 大学などの活動を通して関心を持ち続けることも行動の一つであることが指摘された。また山浦氏からは身近な地域で総合学習をする中で子ども達の意識が育まれていく様子を「きらり」と「ざらり」という言葉で表現されていた。

参加者もそれぞれの現場で行かせるものを持って帰れたようだ。

④課題別分科会

日時：2005年8月6日（土）15:40～17:40

8月7日（日）10:00～14:30

ねらい：開発教育・平和教育が扱うテーマや手法を7つの課題に分けて議論する。先駆的な事例をゲストから聞きながら、自分達ができることを考える。

内容：

- 1 「持続可能な開発の地域展開～市民の取り組み事例を通じて」
- 2 「難民問題と平和」
- 3 「援助国際協力」
- 4 「食とグローバル化」

5 「地域からの文化の再生と開発教育」

6 「教材と実践」

7 「時事問題を教室に（メディア・リテラシー）」

<所感>

各分科会では2日間を通して各課題に対する理解や議論を深めた。特にそれぞれの分野で第一人者として活躍されているゲストの方々の話は参加者に刺激的であったようだ。

また平和教育・開発教育の進め方についても参加者同士で話し合う機会も提供できたので、それぞれの課題とともに今後の取り組みへの布石となった。今回の分科会の議論の続きを、来年度の研究集会でも開催し継続的に議論を深めることが同意された。

3.活動の成果

1) 平和教育・開発教育の広まり

開発教育の経験や参加型の学習の理念・手法を活用した「平和教育・学習」を紹介することを通して多くの参加者に平和教育・開発教育を体験してもらうことができた。

多くの参加者が学校教育・社会教育の現場を持つことから、参加者が「教育・学習」を通した平和構築に関心を高め、参加型の学習手法を活用した平和学習を各地域や学校・家庭・会社などで広める支援ができた。

2) 経験の成果の共有と相互学習

地球的課題を自分とのつながりを通して意識し、取り組んでいく姿勢を養う教育活動に関心を深められた。また、従来の平和教育、開発教育の枠を超えて様々な人々がその経験と情報を共有し、学びあう機会を提供できた。

3) 人的ネットワーク及び団体間の連携協力

各地で持続可能かつ平和な社会作りに関わっている人々を招聘し、開発教育や平和教育関係者と経験共有をする機会を提供したことで個人間または団体間のネットワーク作りの基盤を築くことが出来た。

4) 様々な地球的課題をつなぐネットワークの基盤作り

今回のフォーラムは「持続可能な社会づくり」をテーマにしたことから、通常の「平和」の概念を広げ、さらに受身ではなく積極的な平和の構築に対してアクティブかつ継続的なネットワークの基盤作りに貢献した。

4. 今後の課題

1) 有機的な「平和学習」ネットワークの構築

各地域の指導者から学校教育や社会教育の現場に「参加型の平和学習・開発教育」の輪が広がっていくことにより、その地域における団体・個人のネットワークが形成され、各地域の「学習活動」を通じた平和構築が進められる。

2) 隣接教育活動との連携教育と「持続可能な開発のための教育の10年」

「持続可能な開発」にとって「積極的な平和」は重要な達成項目でもあることから、環境教育・人権教育・多文化教育などの隣接する他の教育活動とも連携協力しながら 2005 年から始まる国連「持続可能な開発のための教育の 10 年」に対して「平和」の視点や学習内容を盛り込んでいくように働きかけていく。

3) 既存の「平和教育」への問題提起と連携協力

被曝体験や被災体験の継承ということに重点が置かれることの多かった従来からの日本独自の「平和教育」に対して、平和学の成果や視点、そして、参加型学習の理念や手法を提示することで、「平和教育」の新たな使命や課題を共有し、新たな「平和教育／学習」の普及推進に向けた教員・市民・NGO／NPO関係者などによる連携協力を図っていく。

4) アジア・太平洋地域の平和学習の共同研究

国内における平和学習・研究の成果を国外、特に身近であるアジア・太平洋地域の平和研究者、実践者に共有し、それぞれの活動をより充実したものとしていきたい。またそれを出版などの形にしていきたい。

以上